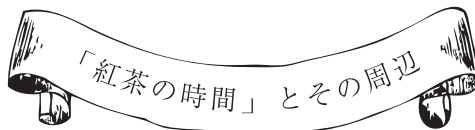


きもちは、 言葉を さがしている



第 52 話

水野 スウ

元旦の夕方に

2024年元旦。天気予報に反して、北陸のこの季節にはめずらしい青空。つい心はずんで、午後から夫婦で金沢へドライブに出かけていました。

崖の上の喫茶店でお茶していた時、ぐらぐらっと来た最初の揺れ。しばらくするとおさまり、ほっと息をついたそのとたん、今度はもっと大きな揺れ。でかい！ これはいつもの地震と違う。怖くなってあわててお店の外に飛び出しました。停めてあった車が地面ごとぐわんぐわん大きく揺れている。立っているのがおぼつかなくて、思わずその場でしゃがみこみました。

ほどなく揺れがおさまったので、家に戻らなくちゃ、とあわててお店に戻ってお会計を済ませ、国道を避け遠回りして裏道を走り抜ける。その間にも消防車のサイレンがあちこちから聞こえてきます。遠くで火の手があがるのを見ながら家に向かう途中、カーラジオから「志賀町震度7」と聞こえてきて、思わず震えあがる。志賀原発どうなってる？

心臓をバクバクさせながら家にたどりつくと、家

そのものは何ともなく建っていたけど、うひゃあ、家ん中ぐちゃぐちゃです。ひっくりかえった本やら食器やら箱やらで足の踏み場ありません。おまけに二重にロックしていたはずの二重窓まで開いている。この地震、一体どんな複雑な揺れ方をしたんでしょう。

幸い、わが家は電気、ガスとも生きていて、その時点では水も出たので即、お風呂に水を貯めながら「こちら二人とも無事、ご心配なく！」とまずはSNSに発信。それからとりあえず食事ができるだけの空間と、トイレまで行く動線（この途中で割れた食器やガラスが散乱してて、この短い距離を確保するのに時間がかかった）と、布団をしけるだけのスペースをつくってから、すっかり遅くなった夕食を冷蔵庫のおせちですませました。その間にもかなり強い余震が幾度も襲ってきます。

奥能登が……

テレビがなぜかつかないけど、パソコンは生き

ていました。地震直後から東京の娘と電話を繋ぎっぱなしにしていたので、「なら、パソコンつけてNHKプラスのサイトで今NHKが放送してる地震情報、リアルタイムで見れるから見て!」と教えてもらう。情報があるって心強い。とはいえ、遅ればせにパソコンで見たニュース映像——津波の避難指示で真っ赤になっている能登半島の地図、激しく炎燃えあがる輪島の朝市通り……奥能登の被害のすさまじさに息をのみました。長いつきあいの友人たちの顔が次つぎ浮かびます。

その後少しずつ、個々の人たちがFacebook（以下FB）で発信してくれる情報を頼りに、奥能登の被害の甚大さが見えてきました。とはいえ、当初は通信がつかない、つながってもすぐとぎれる、特定の場所にいかないと電波が届かない、などなど、何より、一番ひどい状況にいる人は発信すらできなかったもので、後から思えば被害の全体像はまったくといっていいほど見えていなかったのですが。

珠洲の湯宿 さか本

珠洲に津波が来ている、そうわかったときに真っ先に思い浮かんだのは、珠洲の湯宿「さか本」一家のことでした。

新ちゃんこと坂本新一郎さんと出会ったのは30年以上も前の、志賀原発の反対集会。後に、珠洲の「さか本」という知る人ぞ知る湯宿のご主人だと知りました。娘の菜の花さんが生まれるずっと前のことです。

菜の花さん（なのちゃん、といつも呼んでいます）は沖縄のフリースクールで高校生活を送り、そのことを「菜の花の沖縄日記」として地元の北陸中日新聞に連載、私も毎回楽しみに読んでいました。なのちゃんのまっすぐな感性から紡がれる言葉がとてもすでに貴重に思えて、何年も前の紅茶の時間で語ってもらったこともあります。高校卒業後、両親のお宿を手伝っていたなのちゃん、一昨年、22歳の時にさか本のおかみをお父さんから引き継ぎました。

さか本は一体どうなっているだろうかと不安で不

安でたまらなかった時、友人がFBに書込んでくれた投稿で状況を知ることができました。

「生きています

珠洲にいます

とてつもない大きな地震が何度も何度も発生しました

さか本で一緒にしていた方々と 避難しています

さか本のみなさんも けがもなく元気です

電気も水道もダメ

さか本の周辺の土砂災害の危険性もあり

今晚は車で過ごします」

さか本では毎年、常連客さんや親しい友人たちと年越しするのが恒例だけど、今年は彼女もそこに参加していたのです。みんなのからだが無事とわかってひとまずはホッとしたものの、建物はどうなっているのだろうと思いながら、たびたびの余震の中、浅い眠りにつきました。

その友人が1月3日になってから、私も知っている友人夫婦と3人、普段なら2時間半で行ける道を8時間かけて金沢まで車で戻ってきたこと、能登までの道路が大変な状況であること、そしてさか本を心配して訪ねた方の投稿によって、さか本の建物がどうやら無事らしいと、FBを通じて知ることができました。

そして1月13日、なのちゃんが地震後はじめて、自分の言葉でFBにこんなふうに投稿してくれたのでした。

「ご心配、エール、有難うございます。

自分からの投稿が遅くなって、ごめんなさい。私も両親も無事です。

年末年始と一緒に過ごした友人ら20名弱も数日後には無事に帰宅されました。

元旦は、避難所ではないけれど高台の、珠洲消防署の駐車場付近で車中泊しましたが、2日朝以降本日まではずっと家で生活しています。慎重な設計士さんと、腕の良い大工さんと、考えて考える父の三

者がつくった建物は、ほんとうに丈夫です。壁のヒビや剥がれ、ネタ木の裂け、大きな窓のサッシの歪み、戸の傾き、くらの被害で済んでいます。本当に有難いです。ありがとうございます。

電気はまだ戻りません(町内でも戻った家もあります)。でも井戸水を汲んで、薪ストーブで暖をとり、プロパンガスで調理しています。ボランティアの方からバッテリーと太陽光パネルを頂いたので、充電や夜間の照明の心配がなくなりました。電気さえ戻れば、ほとんど元の生活に戻れると思います。でもそれまではこのような生活。早寝早起き、体をよく動かして。これはこれで健康かもしれません。呑気なことを言っているほど心身ともに健康です。

欲しいものと言ったら、薪で直焚きできるお風呂。洗濯機も回るようになんとかしたいな。というところ。お風呂の方は知人と相談しながら、資金集めて何台か購入し、民間のお風呂場所を作りたいね、と昨日から話しています。

もう少し先の仕事のことを考えるとクリーニング屋さん情報が欲しいです。長い間ほんとうにお世話になってきたクリーニング屋さんが亡くなられました。宇出津あたりまでの範囲で、おすすめのクリーニング屋さんご存知の方いらっしゃいませんか。

宿という仕事は、家族だけではまわっていませんでした。漁師、魚屋、農家、八百屋、スーパー、クリーニング屋、掃除や外仕事や配膳のスタッフ、メンテナンスをしてくれる大工さんや水道屋さんや建具屋さんや石屋さんなどの職人さん……キリがないほど多くの方が、みんな健康であってこそまわっていて、ようやくお客さんを迎えられる。今まで本当に有難うございました。これからも、やっていきます。どうぞよろしくお願いいたします」

読みおえて本当にはっとしたと同時に、この状況の中で24歳のなのちゃんがおかみさんとして凛と立っていることが伝わってきて、オロオロしていた私の背筋まで、スッと伸ばしてもらったような気がしました。

ここで書かれているお風呂の件は、もう実現しています。お父さんの新ちゃんが五右衛門風呂をつくっている大和重工という会社に直接電話して「ひと

つ買いますから、5つ支援してもらえませんか？」と交渉したところ、なんと、1個50万円のお風呂を30万円で、あとの5個は中古を無償で提供しよう、とびっくりするようなすてきな返事。それまでにお宿に寄せられていた寄付金で即購入、すでに6つの五右衛門風呂が届き、1台はさか本に、あとの5台も珠洲の友人たちのところに旅立ったそうです(その後、さか本の1台も輪島市三井町へと運ばれました)。

珠洲のこと

奥能登の珠洲には2ヶ所、巨大な原発をたてる計画がかつてありました。28年にも及ぶ市民の長く厳しい闘いの末、その計画がようやく凍結されたのは2003年のこと。

珠洲原発予定地の一つであった高屋地区では、今回の地震で海底が2メートル隆起して海のかたちが変わりました。もしも珠洲の原発計画を止めることができず、その場所に原発が建てられ稼働中だったなら……。その高屋地区は、今回の地震で周りの道路が土砂崩れですべて通れなくなり、水も電気もなければネットも電話も通じず、集落ごと一時孤立状態、誰もそこに近づくことすらできない日々が続きました。

珠洲原発反対運動の中心で、長いあいだ仲間たちの精神的な支えでいらした高屋の円竜寺ご住職、塚本真如さんは、地震後、一時孤立した集落の中のお一人でした。もし高屋に原発が建てられていたら、と新聞取材で聞かれた塚本さん、「もっと悲惨な状況になっていたやろうな、としか言いようがない。止めて本当によかった」と答えておられます。

珠洲での反対運動が激しかった1990年ごろ、私も何度か珠洲に行き、塚本さんのお寺に泊めていただいたことがあります。そうして知り合った珠洲の人たちに会いたくて、わが家の夏のキャンプは決まって珠洲の海でした。浜にテントを張って、こちらから会いに行ったり、テントに会いに来てくれたり。珠洲は娘が幼かったころから、私たち一家の思い出のたからばこのような場所なのでした。

地震後、10日余りたってやっと塚本さんは集落

の人たちと一緒に加賀のホテルに二次避難することができたと友人が教えてくれました。ホテルの塚本さんにお電話した時、「ご無事で本当に良かった。でもお寺が壊れてしまったそうで……」という、「スウさん、そんなことはね、な—んでもないことだよ」。そのおっしゃり方が前とまったくかわらない穏やかさで。あらためて塚本さんというお坊さまの大きさ、深さにが—んと圧倒されて、私は胸がつまって何も言えなくなりました。

「報道特集」特任キャスターの金平茂紀さんが、ホテルで避難中の塚本さん取材した時のことを、こんなふうにお話してくれました。お坊さんの立場でよく原発に反対することができましたね、と尋ねると、塚本さんはこう言われたそうです。「親父から二つのことを教わった。強いものと弱いものがあったら坊主は弱い方につくものだ。むずかしいこととやさしいことがあったら坊主はむずかしい方につくものだ、と」円竜寺20代目ご住職の塚本さん、泣きながらそうおっしゃっていた、と。

珠洲の原発計画を白紙撤回させた市民のねばりづよい反対運動、それがどれほど意味のある大切な闘いだったか、私たちの命と暮らしをいま救ってくれているか、わかるのはこうしてずっと後になってからのことなのです。だからこそ、珠洲に原発が建たないでよかった、志賀原発が止まってよかった、と過去形にして済ませちゃいけないことだと思う。地震がこの先、どこでまたいつ起きるか誰にもわかりません。想定内とか想定外とかいう言葉がどれほどむなしいか、この国のどこにも原発の適地などないと私は思うのです。

半島に原発を建てるということ

1月下旬、それまで通行止めだった能登へのメインルート、のと里山海道が七尾まで通れるようになり、七尾市郊外に住む志田ヒロさんを訪ねました。途中の道路はつぎはぎだらけ。陥没や隆起、地割れなど、どれだけぼこぼこずたずたの道路だったか、応急処置された色の違いでよくわかります。下道にでると路肩まではまだ復旧の手がまわらず、割れた

コンクリートが段差のある道でそのまま積み上がっているところもあちこち。ブルーシートで覆われた屋根の多さが目立ちます。

ヒロさんとの出逢いは30数年前の志賀原発反対運動。団結小屋と呼ばれる原発近くの小屋の壁にそれはすてきな絵が貼られていました。なんて絵の上手な能登のお母さんだろうとずっと思っていたら、後に、実は友禅作家さんだったと知ったのです。

ヒロさんに再会できたとたん、うれしさ爆発してぎゅうっとハグ。生きててくれてありがとう！ 心からそう思った瞬間です。元旦の地震でヒロさんの家は大揺れして、家具など倒れてこわれたものもあったそうだけど、おうちそのものは無事でした。電気は通っていたので、その夜は同じ敷地内に住む娘さん一家と犬たちと、みなで母屋のこたつに集まって余震の続く中、眠れぬ一夜をすごしたとのこと。

志賀原発差し止め訴訟の原告の一人でもあるヒロさんの家から、原発までは約10キロ。3.11以後、志賀原発は止まったままとはいえ、元旦の大揺れと度重なる大きな余震に、ヒロさん一家はどれほど怖い思いをしたことか。変圧器が壊れて大量の油が漏れだし、外部電源の一部が使えなくなり（それが長引けば使用済み核燃料を保管しているプールの水を冷却できなくなる恐れ）、放射線量を測るモニタリングポストも一部が作動していなかったことが後から発表されました。

志賀原発直下に活断層はないと北陸電力が主張して、原子力規制委員会もそれを了承したため、いよいよ再稼働に向けて進んでいたところに起きた今回の地震。もしこれが運転中の地震だったら——考えただけでぞっとします。実際には志賀原発から9キロ先の活断層が動いてずれていたそうです。

何より今回の地震で、原発事故を想定しての避難計画がまったく役に立たないことがはっきりしました。海の底がもりあがって陸になり、地形までもかわってしまった、何千年に一度と言われる今回の地震。道路はいたるところで寸断され、どこにも逃げられず、通信手段も断たれて数日間孤立していた人たちが輪島にも、珠洲にも、いたのです。

「屋内退避せよといわれても、家がもう家じゃ

なくなってるところがこんなにたくさんあるのにね」
「半島に原発を建てるという発想そのものが、そこで生きる人たちをはじめから見捨てているとしか思えないよ」とヒロさんと語りあいました。元旦に起きた能登の地震は、安全対策やら避難計画やらの見直し、なんてレベルの話ではなく、原発をここで動かしてはならない、という何よりの証明じゃないのだろうか、とも。

ヒロさんの家に行く前に、ほしいものは？と尋ねると、りんご、というのでりんごとみかん、それと肉じゃが、お豆の姉妹煮（その日その時、家にあるお豆をまぜこぜにして煮るのをこう呼んでます。この日は、黒豆と小豆とら豆とうずら豆。黒砂糖とほんのちょっとの醤油で味付けした、あまり甘くないおかず風の煮豆）、そして超ロング腹巻（正確には、胸腹腰すっぽり巻とよびたいくらい長い）を、ヒロさんの娘さんの分もふくめて数枚プレゼント。

実はこの腹巻き、私が娘から贈られてあったかさ実感ずみ。能登や七尾の方、電気がとまっていた避難所は寒いだろうな、寒い中での片付けもしんどいだろうな、ちょっとでも体をあたたくしてほしい、きっと体は心ともつながっているから。そう思って、紅茶つながりの人たちが私に寄せてくださったカンパの一部で多めに購入しておいたのです。



一本杉通り商店街

ヒロさんちの帰りに、七尾の市街地へも行ってみました。テレビで何度も目にした和倉温泉の有名なホテルも壁がくずれたり、建物ごと傾いたりしてい

る。それからおそろおそろ一本杉商店街へも。

ここはかつて商店街のおかみさんと一緒にしていた勉強会のために、はじめのころは2ヶ月に一度訪れていた、私にとっても馴染みの通りです。勉強会のはじまりは、以前から紅茶の時間にきていた鳥居さんが七尾に移って鳥居醤油店の若おかみとなり、近所で親しいろうそく屋のおかみさんと相談をして、長い一本杉通り商店街のおかみさん同士もっと知りあおう、というところからでした。

高澤ろうそく店の2階をいつも会場に、醤油屋さん、ろうそく屋さん、漆器陶器屋さん、昆布屋さん、仏壇屋さん、洋服屋さん、和菓子屋さんのおかみさんたちと、互いに知り合いながらコミュニケーションを学ぶ勉強会。1999年にはじまって2016年まで続いたその間に、商店街のそれぞれのお店をギャラリーとしての「花嫁のれん展」がはじまり、やがて北陸新幹線が開通すると能登までも行きやすくなり、一本杉通りは花嫁のれん商店街として、全国にも知られる観光名所になっていったのです。

この通りは特に古い建物が多く、それがまたこの通りの魅力でもあったのだけど、見知ったいくつものお店が無残に崩れています。その様子はテレビで何度も映されて知っていたけど、自分の目で見るのは全然違う。ああ、おかみさんたち、どんなきもちでいるだろう……。それを想像したら、胸がつぶれそうで、この日はただ通り過ぎることしかできなかった。覚悟して会いにいったのはそれから一週間後の2月初めでした。

おかみたちに会いに

地震からひと月余りたって、ようやく一本杉のおかみさんたちに会いに行った時、差し入れはここでも、超ロング腹巻と芋サラダと煮豆。いまだ水の出ない地域で普段のおかずが何より、とよろこんでくれた。連絡しないで突然行ったにもかかわらず奇跡的に、会いたかったおかみさんたちみなに会えて、顔見て、話せて、胸がいっぱい、涙が出ました。

お店がくずれた高澤ろうそくさん、鳥居醤油さん、それから漆陶舗あらきさん、いずれもお店の再建を

願ってクラウドファンディングの呼びかけをちょうど始めたところでした。

1月に行った時、瓦礫だらけのお店の写真は、とてもじゃないけど撮ることができなかった。だけど、おかみさんたちに会えた後にもう一度高澤ろうそくさんのお店の前を通った時、瓦礫の中にゆきえさんが活けた一枝の紅梅を見つけました。その一枝にゆきえさんのきもちがぎゅっと詰まっている気がして、あ、この瞬間を残さなきゃ、と唯一撮らせてもらったお店の写真です。



2月11日、一本杉商店街に面した駐車場で一本杉復興マルシェが開かれました。開店少し前にはもう人でいっぱい、マスコミもいっぱい。高澤ろうそくさんは和ろうそくやお香を、あらきさんは塗のお箸やお椀や割れなかった陶器など、木下精肉店さんはソーセージを、南三陸からは七尾応援のかまぼこや鯖の味噌煮、鮭の焼いたのとか、たくさん。お寿司屋さんは開店早々売り切れ、和菓子屋さんもじき完売。無名塾の役者さんである若村麻由美さんが熊本のみかんを配ってる横で、私は2日前に長野の農園から届いたりんごを来場客さんに配りました。

お客さんとお店の人が顔合わせて、話して、互いに無事を確認しあっていました。お店の再建にはまだまだ時間がかかるけれど、お商売やさんはお店を開いてこそ、お客さんと会ってこそ。どんな形でもお店を開くことが大事だと、一本杉マルシェはこれからも定期的に開いていくそうです。

▼鳥居醤油店さんクラウドファンディング

(3月31日まで募集中)

<https://readyfor.jp/projects/toriisyouyuten>

▼漆陶舗あらきさんクラウドファンディング

(4月28日まで募集中)

<https://www.makuake.com/project/araki/>

まなみさんのアトリエつばさ

一本杉おかみさん勉強会仲間の一人、セレクトショップをご夫婦でひらいている道下まなみさん。みなし仮設住宅に引っ越した先が、私の家から車で3分という至近距離。さっそくおかずと長い腹巻を持って会いにいきました。

お店は地震の被害があったけれど、お店の隣にある子どもたちの絵画教室、アトリエつばさの建物はどこも壊れていなかったとのこと。こんな時こそアートのちからだ、とまなみさんは1月の早い内からアトリエを再開しました。子どもたちに、来る？ときいたら、わーいわーい、とよろこんでやってきたそうです。絵を描きながら、干支の龍のオブジェをつくりながら、子どもたちは互いに、地震の時のことやこわかったきもちを話していたといいます。それを聞いて、ああ、今この場所があることがなんて貴重かと感じました。「話す」は「放す」だから。これまでにないくらい怖い体験をした子どもたちに、そのことを話せる場所があって本当によかった。そして、そんなふういきもちを言葉にする機会を必要としているのは、きっと大人も同じなのだと思います。

まなみさんはアトリエつばさを、絵の教室としてだけでなく地域にひらかれたアトリエでありたい、と願ってはじめてたそうですが、今まさにそれが起きています。知りあいの美術教室の先生が、教室として使っていたところがこわれてしまったのでアトリエつばさを貸してほしいとか、金沢のがんサポートセンターの看護師さんが、能登に住むがん患者さんたちの語り合える場としてつばさを使わせて、といった依頼が次々まいこんでいるとのこと。

まなみさんはその後、2月半ばにお店を再開。き



れいな春いろの服を色とりどりならべて、お店に立っています。

発信すること つなぐこと

地震が起きて以来、私が改めて強く感じているのは、発信そのものが、誰かの力や助けになるということ。菜の花さんが地震から13日目にはじめて自分から発信したFBを読んだ時、本当にうれしかったし、安心しました。

私のところにも、「FBですぐ発信してくれて本当にありがとう！」と多くの人から連絡が来ました。元旦の夕方、家に戻るなり、「私たち夫婦は無事」と発信しましたが、それは、私たちは大丈夫だからね、心配しないでね、と友人たちにいち早く知らせたかったから。それが多くの人に受けとられ、受け止められ、それをまた周りに知らせてくれる人たちがたくさんいたようです。

ネットをしない人が心配でたまらず、若い人に頼んで私のFBやブログを探し、それを読んで安心したからすぐには電話をしないでおう、と電話する時期を待ってくれた人たちが何人もいたこと、後で知りました。また、共通の友人の安否を、直接は怖くて聞けないので、と私に尋ねてくる人たちも多かったです。

私自身、能登の友人たちのFBをチェックしては、「無事です」の一言にずいぶん救われていたのです。投稿のない人は、今はまだ通信できない状況かも、発信するだけの余裕がないのかも、と思って静かに待ち、そしてこれは大事そう、と思った友人の発信

や情報はできるかぎりシェアしました。

FBを見ると、すばらしい、めざましいボランティア活動をしている人たちがいっぱいいます。1月中はそれを見て焦ったり、無力感に凹んだりしていました。でも頭をいったん冷やして自分の年齢や体力を考えたら、奥能登まで出かけて行って目一杯うごきまわる、みたいなdoは自分の身の丈じゃないとだんだん見えてきました。私のできることはたぶん、発信すること、つなぐことだ。

震災以降、本当にたくさんの方からご心配いただいて、お気持ちカンパも品物も私宛にいっぱい送っていただいています。また、能登にカンパしたいけどどこに送ったらいいでしょう、のお尋ねも実にたくさん。そのつど、私の知っている人や活動の中身をお知らせして、その人その人のきもちにあったところにつないでいます。

のっぽくん&アル

カンパ先としてつないだうちの 하나가、古くからの親しい友人、小浦むつみさんご夫婦が経営する自然食品店ののっぽくん&フェアトレードショップ・アルです。<https://noppokun.co.jp>

金沢の隣町にあり、常日頃から生産者さんともお客さんともつながって持続可能な社会づくりを実践している、私にとっても大切なお店。のっぽくんの食品棚にはパレスチナ産のオリーブオイルが並び、アルさんのフリースペースは、フェアトレードについて学ぶ会、憲法講演会、ドキュメンタリー上映会、時にはピースウォーク金沢実行委員会の会場になったりもしている、市民に開かれた空間です。

アルのむつみさんは震災翌日、もう動きだしていました。自ら車を運転して、ずたずたに寸断されて段差だらけの道路をいったいどのようにぐりぬけて七尾までいったのか、集落の人たちが身を寄せる小さな避難所に支援物資を届けにいったのです。そこまで行けるとわかったから、と翌3日は家族で、より大きな車に荷物を積み込んでさらに遠くの避難所まで。行くたびにその様子をSNSで伝え、その上、「お気持ちカンパお預かりします」とも発信してく

れたので、県内外の紅茶仲間からわが家に届くカンパをそのつど手渡しに行くことができました。

悲惨を目の当たりにして自分に何ができるかうろしている時、託せる所があるってありがたい。全国からののっぽくんに送られてくる大量のカンパ野菜、たとえばキャベツ100玉、大根50本、白菜130玉、それを洗ってカットして「何人分」と分けて袋に入れて真空パック詰めする係、またある時は、数100人分の炊き出しの下ごしらえをする係、というふうにLINEで募集のお知らせをしてくれる。あ、それならできる、その日なら手伝える、とこまごま自分にできることがあるのも私には本当にありがたいことです。

能登震災支援プロジェクトSUNくる

田谷船長、と呼んでいる田谷武博さんは、能登での福島キッズ保養プロジェクトを長年になってきた能登の漁師さんです。今回の地震で田谷船長は自らも被災、船を出せなくなったにもかかわらず、すぐさま動きました。必要な支援物資を書き出してFBで募集します。そのリストも実に具体的。水の出ない避難所で紙コップは使い捨てだから小さいサイズを、スチロール碗もお年寄りが多くて容量が大きいと飲みきれないから直径13~15センチのものを、というふうに。

田谷船長は、2月にあらたに「能登震災支援プロジェクトSUNくる」を立ち上げました。

奥能登では宅急便が一部再開したものの、田谷船長の活動している地域ではまだ受け取ることが難しいので（2月末現在）、物資は金沢のライブ喫茶、メロメロポッチにいったん集めて、そこから船長の仲間が取りにくる、または金沢の仲間が届ける、という独自の流通システム。時には、のっぽくん&アルに集まったカンパで購入した物資がどーんとメロメロポッチに届けられ、それが田谷船長のもとに運ばれていくことも。

メロメロポッチの店主さんは金沢市議で、ピースウォーク金沢実行委員会のメンバー。3.11後に仲間たちと「志援隊」というチームを組み、何度も東北

に行っている人でもあります。田谷船長がリストにあげたこまごましたものを業務スーパーで買い出してメロメロポッチに届けに行った日も、店内には、お米やら野菜やら缶詰やら衣類やらの支援物資、それに企業からとどいたダンボールベッドなどなどが、山と積まれていました。

行政がしてくれるのを待っていては間に合わない、公の支援の行き届かないところを見つけ出しては精力的に活動している田谷船長のことも、できる限り応援したいと思い、カンパ先を探している方へつないでいます。

能登への想い曼荼羅

去年11月、愛知県から日帰り弾丸ツアーで紅茶を訪ねてくれた人たちがいます。それぞれに、能登を応援したいけどどこに届けたらいいと思う？と訊いてくれたので、のっぽくん&アルさんのこと、田谷船長のこと、名古屋工業大学の北川啓介先生のこと（ダンボールハウスや保温性のあるインスタントハウスを開発し、被災地に建てていらっしゃる先生、好評で要望が多すぎて研究室が資金不足に）などお伝えしたら、3人がそれぞれ、この3つの違うところにカンパを送ってくれました。

一人は2月はじめ、知り合いのお寺でひらいた能登チャリティバザーの売り上げをのっぽくんに、別の一人はインスタントハウスの北川研究室に、そしてもう一人は主催したコンサートの会場においた募金箱カンパを田谷船長のプロジェクトに、というふうに。能登へのきもちを、やっぱり顔の見えるところや活動のわかるところにできたら送りたいものだと思うのです。そのきもちをつなぐことができて私もとてもうれしかった。

直近では、東京の紅茶つながりの人から、湯たんぽを50個購入したけどどこに届けたらいいだろう、のお問い合わせ。なのちゃんに訊いたら10個ほどの希望、田谷船長に訊くと、避難所やこの地域の人に聞き取りしてから知らせます、とのこと。こうしておそらく3月中には50の湯たんぽが一つ一つ誰かのもとへと渡るでしょう。なのちゃんそこへは私たち夫婦が珠洲に行く時に、船長のところへは物資

中継地の金沢のメロメロポッチに届けにいきます。

私個人のもとに届く品物やカンパは紅茶つながりの人たちから、その外側では、ピースウォークつながり、原発つながり、能登保養プロジェクトつながり、子ども食堂つながりetc.と、さまざまな人のネットワークが、絡まりあい、連絡しあい、助けあって動いている。その図を頭に思い浮かべると、能登を想って行動するたくさんの人たちが描く、現在進行形の能登曼荼羅のようです。

*ここに登場した方へカンパをしたいと思われたら私のところまでご連絡ください。振込口座などおしらせできます。

北川先生の活動へのカンパはこちらから

令和6年能登半島地震被災地への簡易住宅設置支援
一口：1,000円～

<https://www.nitech.ac.jp/.../support-instant-products...>

あらたな日常をつくる

2月に入って、坂本なのちゃんが「次に考えているのは、民間による家屋解体用の重機の購入です」とあらたにFBで発信しました。倒壊しているお家から、位牌だけ、通帳だけ、など、それぞれの大事なものを家主さんに聞きながら取り出していく。大きな業者の一括解体が始まる前にやりたい、と自分でローンを組んで重機を買おうとしている友人がいることを知り、それにかかる費用300万円あまりの寄付を募集します、とFBで呼びかけたのです。なんてすごいこと考えるんだ！と最初は驚いたけれど、いわれてみれば確かにそれはその地で今、ものすごく必要な、求められているものにちがいません。

「さか本に集まったご寄付は、その友人や、もっと困っている人やことのために使おうと思っています。刻々と変化していく状況によって、多少予定が変わるかもしれません。

ご寄付いただいても領収書は出せません。細かい会計報告もできないかもしれません。

それでもいいよ、と思ってくださる方、ご寄付い

ただけますと、とても助かります。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。湯宿さか本坂本菜の花」

このように直接的でまっすぐなお願い。なんとすがすがしくてきもちがいい。目に見える、お金の活きる使いみち。なのちゃんの呼びかけを私も早速FBでシェア。ほんの数日で重機を買えるお金が集まったそうで、その呼びかけはすでにもう終了しています。

さか本は今、大勢の人のいる避難所には行きにくい地元の方や、ボランティアにはいる人たちをお宿でうけいれています。五右衛門風呂のことや重機購入のアイディアを提案したのは、30年前の珠洲原発の計画に反対していた、私も知っている人でした。その彼はバイクで走り回って地元の声を聞き取り、さか本の新ちゃん、なのちゃん、さか本に集まってくる実戦力のあるボランティアさんたちとともに珠洲の未来を話しあっているようです。ああ、ここにも、珠洲曼荼羅を描く人たちがいっぱいいる……。

なのちゃんは「もとの姿に戻るだけが復興じゃない。大災害を体験したからこそ、持続可能な地域のありかたや能登らしさを考えていきたい」と新聞の取材にこたえています。

もとの姿に戻るだけが復興じゃない、と言い切った強さにハッとすると同時に、クッキングハウスの松浦幸子さんから教わった回復とリカバリー、という二つの言葉の違いを思い出しました。回復は元の場所に戻ることを意味するけど、リカバリーは、今の状況を認めたうえで、以前とはまた別の方向へさらに生き活きと進んでいくこと、そのプロセスそのものがリカバリーなんですよ、といってもらったことと、なのちゃんのイメージする能登の復興が重なる気がしたのです。

その意味でも、ちいさな重機が必要です、と発信したことはなんとも象徴的。大型ブルドーザーでそこにある崩れた家も瓦も暮らしの道具も一挙にとりのぞき、土を一律に平らにならししていく、のとはちがうやり方。海がみえなくなるほど高い、コンクリ

ートで固めた防波堤をつくる、というのではない考え方。今回の地震で、行政のつめたさをいやというほど体験してる人たちだからこそ、行政頼みでは実現できない、一人ひとりの素朴で率直な願いがかたちになるような復興ってなんだろう。どうやったら実現できるのだろう。いっぱい語りあって、知恵をだしあって図を描く。さか本に集まる人たちが今しようとしているのは、そういうことなんじゃないだろうか。

かつて、奥能登は過疎で何もなかったところといわれ、そこに原発の計画がもちこまれました。いや、何もなかったところか珠洲の海にはなんでもある、珠洲は本当はとても豊かなところだ、そう信じる人たちが、国策である原発計画に真っ向から反対したのです。東北大震災と福島原発事故の起きるずっと前の1970年台から21世紀に渡って、原発はいらないと意思表示し続けた人たちの底力、屈しない反骨の精神が、今も生きていて感じました。お坊さまの塚本さんも、なのちゃんのお父さんも、バイクで走りまわって地元の声を聴く当時の反原発の同志の中にも。その語り合いの輪に、なのちゃんや珠洲を大好きな若い人たちも加わっている、加わっていくのだろう、と思う時、珠洲曼荼羅はさらに彩り豊かです。

例年、雪の多い1月2月、湯宿さか本はお休み。今年はそれを3月まで伸ばすそうです。電話した時、「だからまた遊びにきてください！」となのちゃんの声はとても元気でした。手伝いにきて、ではなく、遊びにきて、ととっさに言える珠洲の湯宿の若いおかみさんは、震災を経て、多くの人たちとともにあらたな日常を創り出し、その目は珠洲のずっと未来を見えています。

ないことにしない

震災ハイ、という言葉があるそうです。3.11を体験した栃木の友人から聞いた言葉。自分たちも被災して大変な時、ご近所はもっと大変だから助けなくちゃ、と自分のことをさておき、がんばってがんばってすごい力を発揮しちゃったらしいのだけど、3

ヶ月くらいしたら一気にハイから急降下してうつぽくなってしまったそうです。「だからスウさん、無理しないでね、自分がハイになってることもその時は気づいてなかったから」と。

そういえば、と、志田ヒロさんを訪ねた時のことを思い出します。七尾の旧市街はこの時はまだ断水中でしたが、ヒロさんの住む地域ではほんの3、4日前から水が出るようになり、当初の不便な生活からは解放されていました。それまで、洗濯の水は近くの川から、飲み水は少し遠くの湧き水まで汲みにいったヒロさんの夫さん、水が出るようになったら、急に腰の痛みを感じだした、と。何も考えるまなく無我夢中で震災に続く日々を過ごしていたときは、痛みすらキャッチできなかったんでしょうね。体だけじゃなく、きっと心も同じだと思います。疲れたり傷ついていたりしていても、なかなかそこに気づけないのではないかと。

一本杉のまなみさんが「被災地の被災者になって感じたこと」を、FBにこんなふうに綴っていました。

「少しでも人の役に立ちたいとか、微力でも自分にできることを何かしたいとか、いろいろ思うけどやっぱり自分自身が元気でなければそれはできないということです。

まずは自分を大切に。自分を優先することに罪悪感など持たなくていいと思います。

ある方が『やっと断水解除されお水が出てすごく嬉しいはずなのに、まだお水が出ない暮らしをしている人のことを思うと申し訳なくて心が痛む』とおっしゃった。でも、そんな事を思わなくてもいいと思います。まずは自分から、そして身近な家族から1日も早く元気になって。元気になってから周りの困っている人を助けてあげれば良いのだと思います」

うなずきながら、まなみさんの発信を読みました。私自身、電気も水もガスもあってテレビも見られる自分の生活を、どこか申し訳なく思うきもちがあったから。自分の中にあるきもちを含めて、いろんな状況にあるそれぞれの人のきもちを想像しました。

震災の体験は、一人ひとり、ほんとに違う。同じ

地域でも被害の大きかったところ、見た目にはそれほどでもなかったところ（でも家の土台が傾いてしまっているおうちもある）、ほとんど被害のなかったところ。無意識のうちに比べて、自分よりもひどい状況の人に対してもうしわけないと思うきもちが湧いてしまうのかもしれません。

「うちなんかまだマシ、もっとひどい方がおられるから」という言葉を、私も本当によく耳にしました。そうやってご自身を奮い立たせているのかもしれませんが、ただ、本当はどの人ももう十分に傷ついていて、それを相対化することはできないのじゃないだろうか。本当は確かにあるきもちを、ないことにしてしまう。自分の悲しみや痛みを置いてけば

りにしてしまう。それはきっと苦しいことです。

私は、どうかどんな人もご自身のことを大切にいたわってほしい、と心から願っています。自分を大切にいたわるって、たとえば、悲しかったら泣く、悔しかったら怒る、つらかったらつらい、と言葉にするということ。

誰かが、あ、私には今そうすることが必要なんだ、と思うときがもしもやってきたら（それがいつかはわからないけど）。その人がそのきもちを言葉にできるように、ただそこにいられるように、私は紅茶を静かに開け続けていよう。私は私の速度を守りつつ、息を長くして能登とともにありたい、そういうbeでいたい。そんなふうに今、私は思っています。

2024/2/29

